

【研究ノート】

幕末維新时期地方国学者の人的ネットワーク

— 岡山藩陪臣小山敬容の日記より —

近藤 萌 美

はじめに

幕末維新时期の岡山藩の研究はこれまで政治史を中心に段階的な動向を明らかにしている。^①文久二年（一八六三）閏八月十六日、朝廷から岡山藩へ長州藩・薩摩藩に次いで攘夷周旋の内勅が下されたのは、岡山藩に尊王攘夷運動が活発な素地があったからとし、元来ペリー来航以降の時代背景から説明されることが多い反面、岡山藩ではそれ以前の文教政策にその土壌があったと指摘する研究^②もあるが、思想的分析はいまだ不十分であると考ええる。

また幕末思想史研究は、近年平田学の再検討が国立歴史民俗博物館において宮地正人氏を中心に進められ、気吹舎の全国ネットワークが明らかにされてきている。^③

本稿では、幕末維新时期岡山藩尊王攘夷派番頭土肥典膳^④に仕えた国学者小山敬容の日記^⑤（文久二年一月～閏八月、明治二年一月～明治三年十二月）を題材に、幕末から明治初期にかけて一学者が形成した人的ネットワークがどのようなものであったのかを探ってみたい。

一 小山敬容とその日記

小山敬容は天保六年（一八三五）一月二十六日に大坂中之島で生まれた。初め莊太郎と称し、字は伯徳、桂洲と号した。父の義行（通称彦作）は備

前国上道郡平井村出身の剣客であったが大坂で遊学していた。母は兵庫平野村山根惣右衛門次女登波といった。後に詳述するが敬容は父方の縁戚関係の中で人的関係を取り結んでいく。敬容八歳の天保十三年（一八四二）に家族で郷里の平井村に帰ってくるが、それまで敬容は四歳の頃から大坂の儒者安藤秋里の門に入り、字を習った。この時「容」という名、「伯徳」という字、「桂洲」という号を付けられた。帰郷後の天保十四年、敬容が九歳の頃より水田苔松に字を習うようになり、わずか十二歳にして、「桂洲詩稿」を編んだ。幼い頃より読書、作文など大人に劣らず、神童と呼ばれていたという。^⑥

文久二年（一八六一）二月三日、敬容二十八歳の時に岡山藩番頭伊木忠哲（一二〇〇石）に仕えるが、それまでの十六年間の詳細は不明である。残された和歌草稿から二十三歳の頃には森寺美郷^⑦の門に入っており、その後も島岡宗蟻^⑧、女流歌人の安原玉樹、藤原操南と交流していることがわかっている。伊木忠哲に仕えた同年九月七日に江戸へ出立、忠哲とともに平田鉄胤に入門、毎月五・十の会日は加藤千浪の歌会に参加した。慶応元年（一八六五）八月一日、敬容三十一歳の時土肥典膳隆平（番頭、四三〇〇石）に転任する。土肥典膳は伊木忠哲の実兄であり、忠哲は土肥家より伊木家へ養子に入っていた。忠哲と敬容が文久二年十月に気吹舎に入門した約二ヶ月後の十二月に典膳も入門していた。同三年十二月より京都騒然のため典膳とともに京都へ赴き、翌明治元年（一八六八）八月～九月は備中松山藩主謹慎一件に力を尽くした。^⑨十一月に典膳が中老となるも、同二年

八月十二日病により四十三歳で死去する。敬容は典膳の子息修平とともに明治三年二月二十日より京都の大学校へ遊学。八月二十七日に廃校となるも、そのまま平田鉄胤の塾で学び、十月十四日帰国。十二月十四日より奈良県権大属に任せられる。同四年一月十七日少参事、二月十二日には大監察に進級、武文館館宰を命ぜられた。六月十一日割腹自殺。享年三十七。年貢上納並びに収税に手落ちありとして謹慎を命ぜられたことに対して、そのぬれぎぬを晴らす術なく、意を決してのことであつたという。辞世「おもへぬ民にかかりてすつる哉君親の為をしき命を」であつた。

岡山県立記録資料館には①文久二年一月～閏八月と②明治二年一月～明治三年十二月の日記二冊が所蔵されている。敬容の没後に子息鈴太郎によって編集された年譜⁽¹⁾には、「文久二年壬戌、廿八歳、此の正月一日より日記あり、(九月より三年七月まで失)」「同三年癸亥、廿九歳、八月一日より詳細なる日記あり、没する日まで九年間、一日も書かざる日なし、一事も録せざることなし」とある。この年譜が書かれた明治二十六年段階には、⁽²⁾まとまった形で日記九年間分が家蔵されていたことがわかる。その後いつどのようにして日記が散逸したのかは不明であるが、前述のとおり、わずか二冊であるが岡山県立記録資料館で所蔵している。①の文久二年は伊木忠哲に仕えはじめた年であり、九月四日から忠哲とともに江戸の平田鉄胤に入門する前の期間に記されている。江戸に遊学中の日記は、年譜編集時にはすでに失われていたが、文久三年八月一日から明治四年六月十一日までは一貫して日記が書かれていた。②はその間の明治二年一月～明治三年十二月に記されたものであるが、前述のとおり敬容は明治三年十二月十四日より奈良県に就職したため、この日記は、敬容が岡山藩番頭土肥家に仕えた最終期に記されたといえよう。

以下、この日記からわかる小山敬容の人的ネットワークを三点にわけて概観してみたい。

二 人的ネットワークの広がり

(1) 岡山藩番頭伊木家、土肥家の家庭教師

敬容は文久二年(一八六二)二月三日に岡山藩番頭伊木忠哲に面会し、しばらく間をおいて、三月四日にはじめて「評定所御供」をした。ここではじめて出勤した三月を示して、伊木家においてどんな仕事をしたのか確認したい。

三月 大

癸未	家君赴
朔日 晴	龍口鹿狩、留守
二日	
三日 晴	賀当日人脉々
四日 晴	初供到評定所
五日 晴	登城
六日 晴	同、午時到御後園今年覽就国清公還 ⁽¹³⁾ 忘行奉射的也
七日 晴	同、見於竹田河原、阿部門人野試合
八日 晴	登城、直到土肥君下邸、於下邸諸君覽試劔、直帰省薄暮帰 邸
九日 曇	到評定所、九半帰邸
十日 雨	到円山、四ツ半帰邸
十一日 晴	登城
十二日 晴	到評定所、午時より西山代参、晩本伊木氏家士御招
十三日 晴	登城、八ツ半帰邸
十四日 晴	登城八ツ半帰邸、晩到宮城氏寐番
十五日 晴	登城八ツ半帰邸、晩訪大忠不逢、桜御門桜満開 降

十六日晴 登城、八ッ前帰邸、七ッ比到大伊木君荒手下邸
夜帰省宿

十七日晴 朝帰邸、登城九ッ前、帰邸

十八日晴 登城、九ッ半帰邸、寐番代島村、夜漸雨烈風

十九日晴 御評定所九ッ半帰邸、御内所土肥君へ御出、晩家君も
四ッ過御帰り

廿日 晴 御郡会所四ッ半済、八ッ半比御本家へ御咄し、夜半御帰邸

廿一日晴 御評定所四ッ半済

廿二日雨 御城八ッ前帰邸

廿三日快晴 御供休、履歴序巻写畢、巻一始

廿四日晴 同、高倉山鹿狩、石菊水栄行獲物都五十一ト云

廿五日雨 同

廿六日晴 同、家君国清寺并權山⁽¹⁾御墓參

廿七日晴 同、芳滋米、寐番夜御会
午後

廿八日曇 八ッ比より雨、同、履歴一終ル五十八枚、同二巻四十八枚
於御旅所大伊木君臣寺西佐兵衛、催寄馬依雨不果、遺憾

廿九日晴 同、帰省、遣弟幸之丞於昇丸君臣武田梶之介之家嗣、夜平井

晦日 雨 終日予休、家君御不快、四ッ前帰邸

敬容は右のように主に伊木忠哲の御供をすることが多かったが、それと並行して、二十三日、二十八日にあるように「履歴」の筆写をしている。これは斎藤一興編「池田家履歴略記」のことで全十五巻を二月二十五日から始め、八月十日までかけて行った。

文久三年十月三日から江戸の平田鉄胤「氣吹舎」に入門。元治元年（一八六四）四月七日⁽¹⁵⁾まで在塾した後、慶応元年（一八六五）八月一日からは番頭土肥典膳（伊木忠哲の兄、四二〇〇石）に仕える。仕え始めた頃の勤務がどのような内容かは日記がないので不明であるが、明治二年（一八六

九）一月から明治三年二月二十日に京都へ遊学するまでは、土肥家とともに、以前の主君である伊木家、番頭の上坂氏（一〇〇〇石）三家の家庭教師を勤めている。一例として明治二年一月十七日付日記をあげると「十七日朝晴、昼後より曇晩雨、朝より出府上田寄、しはし語る、上坂氏御稽古初二付、昼飯御酒賜ふ、御屋敷にて若様嬢様御読書習字、伊木氏にて勝君御本井御清書直し」とある。三家の子息子女の学問指導を行っている様子がわかる。

それと並行して、土肥典膳の命により様々な筆写をしている。日記からみえるのは、藩政改革関連（「藩治職制写」（明治二年三月）、京都の攘夷派の動向（「京都菅原蕙子建白」⁽¹⁶⁾「京都浪士の攘夷建白書」（同年三月）、祭祀関連（「招魂祭祀祝詞」⁽¹⁷⁾（同年四月）「和氣氏事蹟」（同年七月）、箱館戦争始末（同年六月）等である。土肥家の仕事とは別に家塾の経営もしており、五〜七名の生徒を教えていた。

（2）京都文人との交流

日記からは敬容が交流した文人についても詳しくみることができない。一方で述べたように敬容は二十三歳の頃には森寺美郷⁽¹⁸⁾の門に入っている。美郷は文久元年（一八六〇）五月二十九日に亡くなるが、明治二年（一八六九）の命日に敬容が中心となって彼の追悼の歌集を作成した。日記にはその準備の手順と、関わった人物が記されているが、そこから岡山の文人をはじめ、京都の文人も交え、ネットワークが形成されていたことが確認できる。以下日記本文を引用しながらみていきたい。

美郷の命日の五月二十九日の約三ヶ月前から関連の記事がみえる。
（明治二年二月一日）

今朝河瀬格誠より十二月廿七日認之書到来、田務院画帖一匣面五延六、年々一句首小本三到着す、書中大国翁へ相願置候、美郷翁歌集序文之事并長尾郁太郎靈祭朝廷より御手厚被成下候一条、備後福山迄水呑浦村上晋平か事等委しく申越す

河瀬格誠とは京都御所の衛士であり、大國隆正⁽¹⁹⁾に師事していた人物であるが、彼からの書翰には敬容が大國隆正に依頼していた美郷の歌集序文の事が詳しく書いてあったとある。その後しばらく関連記事は見えないが、同四月二十一日の記事に、

出勤かけ、上田⁽²¹⁾へ寄たるに御船志摩か京川瀬格誠より託したる紙包金花堂へ出し置たりとあれば金花堂へ行受取、適々翁追悼之歌、京人のをあまた取集ておこせたる也

出勤中に上田及淵へ寄ったところ、京都に行っていた岡山藩の神社取調役御船島子が河瀬から託された紙包を金花堂に送ったと聞き、それを受取ったところ、京都の人たちが美郷追悼の歌をたくさん集めて送られてきたという。金花堂とは、岡山城下西大寺町にあった京の上茶や上菓子を取り扱う商店⁽²²⁾であった。二十三日には、「上田へ行、一昨日格誠より差越たる短冊など見せしはしかたり、直に石山へ持参したるに、桂窓師留守也、内所僧に渡し置」とあり、上田及淵と相談した後、美郷の門下であった石山桂窓へも相談しようとしたが、留守だったため置いて帰った。五月八日「馬仏御屋敷来、適々翁追悼会之事ニ付、石山へ来り呉よといふ、ハッ半比より行、摺出し則下書、日暮るまで酒のみかたりて帰」とあり、小野田馬仏⁽²³⁾を介して、石山桂窓の所へ行き、版木を作り、下書きをした。九日は、「終日在宿、適翁追悼の歌等考て一日を曠す」とあり、一日中、自身の追悼歌を考えて過ごし、二十一日は、上田及淵に美郷翁追悼長歌の校訂を頼み、二十三日は「美郷翁追画会展観」を認めたという。展観とは敬容が出品した長歌のことであろう。二十四日は「七ッ過円務院へ展観持参す、馬老来りをり、共に酒飯して五ッ半過る比までかたる、其間辻太輔、清泉太郎来、殆雅会也」とあり、岡山城内にある円務院へ展観を持参し、それを題材に小野田馬仏らと雅会ともいえるような酒宴を催したという。当日の二十九日については次のようである。

けふ磨屋町観音坊にて故美郷翁追悼書画会をす、兼而也、追悼之歌へ京撰備中其外処々より帖紙短冊等あまた集りたり、そを屏風に張、当

日之展観又夥し、出席して、揮毫の輩にハ池田可軒君、七歳童子松田一國、板倉之雲仙、一宮ノ豊州、上島寅彦、斗藤、桂窓、芳滋⁽²⁴⁾、安藤竹斎、小堀松蔭、米邨、石万年、其余あまたなれとことくハ覺らす、見物にハ御屋敷若君伊木勝君ヲ始、実に貴賤雲集といふへし、なおく言語筆端にハ述べたし、予かけふの展観にハ長歌を書て行たりここにあるように追悼の歌は前掲の京都のみではなく、摂津、備中の他にも各所から数多く集まったとある。それを屏風に張って当日は展示をしたというのだから美郷の書画の展示とともに圧巻だったであろう。

前にみたように京都の文人の歌の短冊を取りまとめる中心となったのは、大國門下の河瀬格誠であり、それを京都から岡山へ送ったのは岡山藩の神社取調役御船島子であった⁽²⁵⁾。明治二年一月二十一日付の日記には御船については次のように記されている。

ハッ半比酒折社司御船志摩、香登神職河崎豊後來、当国内諸神社取調出来候ニ付京神祇官へ罷出候也、野呂西川等へ添書してよと上田より伝言也、故に野呂久左衛門、西川善六、河瀬格誠、蜷川図書、本居中衛等へ添書す、腰かけながら一盃出す、晩刻福島へ下りて直に船に乗といふ

上田及淵を介して、酒折宮社司の御船と香登の神職河崎が、岡山藩の神社取調ができたので、京都の神祇官との橋渡しをしてほしい旨敬容に依頼してきたので、敬容は河瀬をはじめ、京都にいる西川、蜷川、本居や敬容と同じく土肥家に仕え京都に滞在していた野呂に添書をして、御船らに託してもたせた。その足で御船らは京都に向かったとあり、前に引用したように森寺美郷の追悼歌を京都から送った四月二十一日にはいまだ京都に滞在していたのであろう。このように、敬容は岡山藩の神職と京都の神祇官をつなぐパイプとして、岡山藩内でも頼られる人物であったことがわかる。

京都とのネットワークとしてもう一人ふれておきたいのが、蜷川図書(式胤)⁽²⁶⁾である。前述したように明治二年一月二十一日に御船と河崎の上京の際に敬容が添書した中の一人でもあるが、敬容はこの蜷川に対して土

肥家蔵書に関してやりとりをしている。同年一月十六日付日記には次のようにある。

終日在宿、朝河瀬清兵衛へ書状認、去秋桂窓より相託し、美郷壽衣画讃掛物、今朝平井三大夫か便に頼遣す、野呂久左衛門か書状も同断、昨日柳屋出二付平田翁、藤木肥後守、菊屋四郎兵衛へ年始状認、蜷川図書へハ経平公御著述、春湊浪語の内制度ノ事に関り候条を書拔、紙数十二三枚斗先比より写かけ、けふ成たれハ書翰相認遣す

土肥経平は典膳の四代前の先祖であり、有職故実の研究家として著名であった。³⁷⁾『春湊浪語』三巻は国史、国文学及び有職故実に関する考証を主とし、和歌、音楽に関係したのもも収録した随筆で、安永四年（一七七五）に跋文が書かれた。³⁸⁾それを制度に関する部分だけ敬容が抜書をして蜷川に送ったという。また、同年三月十七日付日記には

四ッ前より出勤、上坂氏へも参、御屋敷嬢君御風邪、若君斗、伊木氏へ出、鉄君長瀬秀三老と共に酒飯給ふ、けふ中老若年寄同様ニ被成候由御触あり、けふ柳屋便に蜷川図書へ御蔵書の中、軍器考補其外十七冊遣ス

ともあり、新井白石の武家故実書『本朝軍器考』を下敷きにより、経平によって著された『本朝軍器考補正』十二巻³⁹⁾を含めた蔵書を送っていることも確認できる。敬容は蜷川に対して、土肥蔵書のレファレンスを行っていたといえよう。これら蜷川との学術上の交流から、京都と岡山という地域を超えた、文人サークルの広がりとその学問の深さが垣間見られる。

敬容の国学者としての学歴は一、二（一）で確認したように青年期の森寺美郷のもとでの修養を基礎に、伊木家登用後、主君忠哲とともに遊学した江戸の気吹舎において確立された。明治三年の日記の記述からうかがえるのは、その遊学を通して形成した学術的人脈をもとに、維新期の神祇官に関係した国学者をはじめ有職故実家らと密接につながりもっていたということである。そしてその学問的性格のために敬容の日記は、維新时期岡山藩の神社政策を考察する資料としても注目できよう。

（3）小豆島とのつながり―太田秋満を中心に―

敬容の人的ネットワークに関して特筆しておきたいのが小豆島とのつながりである。敬容は十三歳の頃から小豆島に多く滞在した。⁴⁰⁾小豆島上庄村⁴¹⁾には、敬容の祖父謙（通称庄太郎）の弟が庄屋の紀氏へ養子に入っており、謙の娘つまり敬容の父義行の妹も養女に入った後、紀盈之の妻となるなど、紀氏と小山氏は濃い姻戚関係をもっていた。その後も敬容の妹が盈之の養女となっており、敬容にとっては伯母、妹といった比較的身近な血縁親族のいる場所であった。⁴²⁾

日記によると、明治二年二月にも五日から十三日まで九日間小豆島に滞在している。この時は伯母の還暦祝が主な用事であったようであるが、その間に様々な人物と交流している。ここからは、具体的に日記を引用して敬容の小豆島での人的ネットワークとその特質を確認していきたい。

（明治二年二月）⁴³⁾

四日晴

けふより中四日之御暇相願小豆島へ渡る也、但家翁相伴、晴田秋之丞来られ候読書せず、朝家翁一番二行、舟約束し、八ッ過相伴行たるに風あしけれハ明朝まで待よといふ、されハとて槌太郎へ寄しはしかたり、予ハ亦三番藤原敬介へ寄て李吉としはしかたりて帰る

五日曇昼より晴

朝七ッ比より出て一番へ行乗船、空くもりていとおほづかなけれと先漕出たるにはのく明る比児島かたにて漸らに空も晴たり、犬島近きわたり迄行たるにあとより来る船あり、尋けるに小豆島に帰る舟也といふ、さらはそれに便あらんとて乗移り、一番の舟は返したり、伊亭末に舟はてたるハ八ッ過る比也、やかて上庄へ行、伯母君はしめ皆よろこひあひて酒くみつつ日暮たり、引木屋邦太郎来りをれり

六日晴

けふ北山の里なる八幡山の仏像を宝生院へ取越せと聞て行て見る、其さま別に記録あり、直に池田村岡田光右衛門へ行あらず、父善右衛門、妻おたかなと出逢てもてなす、金花堂か属之一条、よしか母呼て何くれと談す

七日曇晚より雨降風はげし

けふよしか母并親類敬次郎松五郎等来り何くれと談したれと兎角にむつかし、何分先方母親類ともかいふ処は夫々公然たる道理也、わか金花堂のいふは畢竟私論にて表たされハ諸事先方の意にまかせたり、されと別に一筆有る也、けふも光右衛門瀨崎より帰らず

八日晴

今朝光右衛門瀨崎より帰りぬ、何くれと談し置て帰らんとしけるに、酒とり出てとむ、ほとくハッ過までのみて出、肥土山へ越す秋満へ寄、土庄へ行て留守也、東二郎をよひて洲崎駒吉へ内意談し呉候様頼、今宵ハ太田伊右衛門かり行てやとる

九日晴

秋満土庄より帰り来て伊右衛門宅にて逢、しはしかたり伊右衛門同道にて上庄へ行、今日上庄伯母君還暦御年賀に付伊勢講なり、来客ハ三宅五郎、太田伊右衛門、伊勢佐伯一郎、太田彦右衛門、油屋七右衛門、堺屋角太郎、浜野屋之某、井上家内中、赤穂屋井口、女客あまたなり、以上三十人計也、時太郎高松へ入学したりけるを祝ひニ付様子遣し、きのふ帰りたり

けふ池田より人越したり、伯母君を寿く歌

つゝみあへぬ君か袖よりうれしさのもれてわれにもかゝる善哉

十日晴

夕かけて肥土山へ行、芝居あり、一切程見たり、秋満へ行とまりたり、東二郎も来りをり、明日、瀨崎へ行へしといふ

十一日晴

肥土山より帰る、けふ上庄餅つき也、けふも来客七八十人計

十二日晴

けふは帰らんとしたるに瀨崎作右衛門船明朝出といへは其便にとて待、なにくれと認ものあり、久見屋次郎夜前渡海のよし也、長崎へ書状認頼置

十三日曇出

早暁七ツ頃より上庄を出て瀨崎へ出、空けしきあしく雨にならんさま也、船頭舟出さすといふ、さらはとて又大谷へ行、手くり船借ておし渡る、四ツ過小串に着、夫より飽浦迄ありき、渡し舟に乘て一番に渡り、帰たるハハッ比なるへし、今朝肥土山油屋松太郎よりそふめんを送る瀨崎波戸の上へ人にもたせ越したる也

十四日雨

風こちにてあしけれと強て出勤す、若君嬢君に少々計り御読書し、伊木氏へ寄、家君上田会の事御尋に付其返答に又御城迄出、青山忠八に申置、金花堂へ寄、此間中の始末何くれとかたる、酒出したり日暮帰る

(中略)

廿六日晴

佐五郎、菊十郎、亀吉、幸太郎、喜藏、寅吉

島岡宗蝶か詠草取調す 河瀬格誠への書認、神山の仏やらひ写遣ス
廿七日柳屋便御用場之願

敬容は父親と五日に小豆島へ渡海した後、六日に瀨崎富岡八幡山(現瀨崎八幡神社)の神宮寺にあった本地仏を宝生院に移す、いわゆる神仏分離を見学した後、同日に岡山城下西大寺町の金花堂で働いている小豆島出身の下女のもめこと(詳細は不明)の仲裁をし、八日は池田村大庄屋岡田光右衛門と会い、九日は肥土山村大庄屋太田伊左衛門宅で太田秋満と会った^(註)。同日の伯母の還暦祝は三〇名程の来客があり盛大に行われた。翌日十日は肥土山で芝居を見て再度秋満と会っている。十三日に岡山に帰ってきて、十四日に金花堂へ報告に行き、二十六日に京都の河瀬格誠へ八幡山の神仏

分離について自らの考えを述べた散文「神山の仏やらひ」の写を送っている。二(2)で確認した国学者たちのネットワークがここでもうかがえる。³⁵⁾

この後敬容とよく交流しているのが太田秋満である。³⁶⁾秋満には彦太郎³⁷⁾、次郎兵衛³⁸⁾という二人の子息がいた。明治二年三月十三日に秋満が神職になるため敬容に岡山藩神職へ取次よう依頼するが、そのやりとりの中でこの二人の子息も登場する。以下引用しながらみていきたい。

十三日曇、昼より大雨、終夜殊ニ甚し

朝出勤かけ上田へ寄、上坂氏へ出、御屋敷にて御稽古例のごとし、伊木氏へも出、夜五ツ前雨甚しけれハ、久見屋へ行、留る、次郎兵衛小豆島行、小豆島秋満より先達而相願候神職之義ニ付、岡越後へ行逢

(中略)

四月小朔日晴

屋前より出勤、上坂君御屋敷へ御出ニ付御一緒ニ読書す、伊木氏例のごと、晩早かりけれハ、久見屋へ寄、過日小豆島より帰りたり次郎兵衛兄彦太郎神戸にて軒殺に逢たり、二月廿一日の事也、尤攘夷諸主張暴言に及候と相見て、津山出張之者召捕、和田のはなにて夜中殺しざりとて、死骸ハ小豆島へ連帰りたりとも

二日晴

教太郎、菊十郎、佐五郎、亀吉、幸太郎、晩虎吉

古事記序写畢、小豆島土庄虎之介来、金花堂下女一条也、小豆島秋満へ悔状且囑之神職之事申遣ス、其はしに神戸にての事承つれとたゞに夢かとのミさとられて何といひなくさめ参らせんことの葉もおもひえすなん

国のためすてし命の何そはといひつゝ君や袖くたすらむ

(中略)

七日晴

屋前より出勤、上坂伊木両君へも参る、平田先生へ書状出ス、駈戒

論³⁹⁾上木之事、彦太郎横死之始末等申遣ス

(中略)

廿一日晴

出勤かけ、上田へ寄たるに御船志摩か京川瀬格誠より託したる紙包金花堂へ出し置たりとあれは金花堂へ行受取、適々翁追悼之歌、京人のをあまた取集ておこせたる也、今朝槌ヶ原光太郎来、先比太左衛門へ神職之事頼置たる返事持参也、一宮大守安房参り昼候よし也、則其書状久見屋持て寄たるに、幸なる哉小豆島彦左衛門参りをりて直ニ渡す、晩刻又久見屋へ行て秋満、津田安右衛門など、酒斟、四ツ比迄かたりて帰る、京藤木肥後守殿より時勢の事書通あり、閑東不穩赴

廿二日大雨、昼より晴、又大雨

喜蔵、教太郎、佐五郎、亀吉、亀八、幸太郎、虎蔵、菊十郎

小豆島太田彦左衛門彼一宮大守安房へ同道致候様申ニ付昼比より行、則同道したり、此安房ハ小豆島恭順か義赦也

敬容ははじめ岡山城下石関町酒折宮祀官岡越後に依頼しようとしたが、結局のところ一宮の大守安房に取次ぐことができた。敬容と秋満のやりとりは岡山城下西大寺町の薬商久見屋に養子に入っていた秋満の二男次郎兵衛が仲介していた。四月一日に秋満の長子彦太郎が二月二十一日神戸で斬殺された一件について次郎兵衛から知らされ、その顛末を七日京都の平田鉄胤に書状で知らせている。

敬容は津山藩領であった小豆島肥土山所在の太田秋満の神職願を岡山藩神職に取次ぐ役目をしていたが、その際小豆島における情報や、尊王攘夷に関わる事件を京都の気吹舎関係者に知らせるようにしていた。ここでも気吹舎の全国ネットワークが機能しており、敬容がその橋渡しとなっていたと指摘することができよう。

おわりにかえて

以上、小山敬容の日記を中心に彼の人的ネットワークについて資料を紹介しながらその特質をみてきた。国学者であった敬容は岡山藩番頭であった伊木家、土肥家に任用され、その後奈良県で官吏として登用されていくが、筆者はこれを幕末維新时期にみられるある一種の成功譚に属するのではないかと考えている。本稿(1)でみたように、彼は岡山藩の中でも文人たちと頻繁に交流し、自らが学問を通して築いた人脈を使って、岡山藩内の神職や彼にとって幼少期から身近であった小豆島の国学者の取次ぎを行っていた。また、本稿では取り扱えなかったが、典膳死去後に子息修平と京都の大学校に遊学するが、その際も気吹舎をはじめとした文人との交流が数多く記されている。

幕末維新时期は変革期であるがゆえにその変化を追うのに資料的制約がある。それが日記という形で残されているということは、個人のバイアスが含まれているものの、その当時の社会を分析する格好の資料が残されていると思う。また、本稿では詳しく論じることができなかったが、敬容は吉備津神社の藤原高雅らとも頻りに交流している。高雅をはじめとした国学者との交流を分析することによって、「はじめに」で述べた岡山藩の尊皇攘夷が活発な素地を考察する一助となりうるのではないかと考えている。現在は文久二年一月〜閏八月、明治二年一月〜明治三年十二月の日記といった限られた資料のみを見ることができたが、今後残された七年分の日記の所在の探索をはじめ日記の再読や周辺資料の分析をすすめていきたい。⁴⁶⁾

〔注〕

(1) 北村章「幕末岡山藩の政治過程について―藩論と藩庁首脳部の変遷を中心に―」岡山県史研究、一九八三

- (2) 仙田美『和気郡史通史編中巻Ⅲ』二〇〇二
- (3) 『国立歴史民俗博物館研究報告 平田学の再検討(一)〜(四)』二〇〇五、二〇一〇
- (4) 岡山藩番頭。のちに中老。文政十年(一八二七)土肥惺平の子として生まれる。安政四年(一八五七)家督相続、知行四二〇〇石。嘉永六年(一八五三)黒船来航以来尊王攘夷を唱える。安政五年番頭、文久二年(一八六三)左大臣一条忠香から岡山藩主池田慶政に国事周旋の依頼があり、周旋方が設けられると、典膳は土倉弾正、伊東左兵衛、江見陽之進らとともに任ぜられ、京坂と国元の間を奔走。文久二年(一八六二)十二月に西川善大の紹介で気吹舎に入門。慶応二年(一八六六)幕府が長州再征の軍を起すすと、尊攘派と図り、播磨国境の和気郡三石村で征長軍の西進を阻止することを企てた。慶応四年一月鳥羽・伏見の戦いが起こると、皇居の清和院門を警備した。同年新政府の軍務局判事となったが、同年五月帰国、岡山藩中老席、十一月中老に任ぜられた。明治二年(一八六九)病死。享年四十三歳。(『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社、一九九四、宮地正人「幕末平田国学と政治情報」『幕末維新期の社会的政治史研究』所収、岩波書店、一九九九)
- (5) 小山敬容については、『岡山県人物伝』(岡山県、一九二二)、『岡山市史(人物編)』(岡山市役所、一九六八)、『岡山県歴史人物事典』を参照。詳細は岡山県立記録資料館所蔵小山敬容資料(以下①②)から補った。①敬容の遺児鈴太郎が明治二十六年(一八九三)頃に纏集した、歌集・散文集「安々居歌集 下」に所収の年譜、②明治四十三年(一九一〇)の秋季陸軍大演習に天皇が岡山へ臨幸した際に敬容の門人によって調査、作成された「維新前勤王功労者小山敬容先生贈位請願書并履歴書」。
- (6) 「安々居歌集 下」所収、「上田及淵撰小山敬容墓表」による。
- (7) 歌人。寛政十二〜文久元年五月二十五日(一八〇〇〜六一)播磨国尾崎村(現兵庫県赤穂市)に生まれ、赤穂藩に仕え柳田恭輔と称したが、後に備前岡山に移って軽部氏に寄食、その仲介で岡山藩士森寺氏の養子となり、名を美郷と改める。天保四年(一八三三)香川景樹に入門、のち秋山光彪に学び、河野鉄兜、長治祐義、藤井高雅、中村良頭、藤田来鶴、小野田馬仙、島岡宗蝶、安原玉樹、野崎附らと交遊した。音楽に堪能で笙に長じ、書、篆刻も巧み。初め岡山富田町に林泉静処を構え、後に妹尾、さらに網浜に移って書若日厚村舎を設け、晩年は後進に笙や書を教えた。敬容の他に石山桂窓、森芳滋らが門人。歌文集『香細園家集』を残した。(『岡山県歴史人物事典』)

- (8) 安政・文久年間に岡山上之町に住んでいた浪人。藤井高尚に学んで和歌をよくし、茶道に通じ宗匠と呼ばれた。(『岡山市史人物編』)
- (9) 民政家。天明六年二月十一日(寛治三年三月二十八日(二七八六)一八六五)。備前上道郡三幡の大庄屋。民政につくし、郡代掾にとりたてられる。書、詩歌にすぐれた。名は練清。字は澄江。通称は深蔵。遺稿に「練清文集」など。(『日本人名事典』講談社、二〇〇二)
- (10) 岡山県立記録資料館所蔵小山敬容資料には「慶応四年辰八月 御手元御用ニ付 上京御入用勘定帳 小山庄太郎」が残されている。年譜によると八月十日松山へ行き、十五日帰岡、十六日上京を命ぜられ、二十日京都着、二十九日京都出発、九月三日帰岡、その後十一日松山征伐とある。勘定帳は上京の八月十七日から帰岡の三日までの入用覚であり、九月六日に勘定所に提出した控である。
- (11) 前掲注4①。
- (12) この年譜は敬容の子息鈴太郎が編集したものだが、その中には、敬容の自死について明治二十六年に当時の奈良県知事海江田信義に照会した旨の記述がある。
- (13) 池田輝政。
- (14) 操山。池田家菩提をまつる曹源寺カ。
- (15) 以上「金銀入覚帳」(『国立歴史民俗博物館研究報告 平田国学の再検討(三)』二〇〇九収録)
- (16) 横井小楠を暗殺した十津川郷士の助命嘆願。
- (17) 四月三日に御後園で関東戦没の士のために招魂祭が催された。この招魂祭のために上田及淵が祝詞を作成。それを敬容が典膳と自分の分として二冊写す。上田及淵は敬容の国学の師。文政二年(一八一九)七月二日肥後天草郡志岐郡で生まれる。慶応元年(一八六五)一月より岡山藩藩校に出仕、明治元年藩命により和氣清麿、児島高德、池田家の祖備正行の事蹟を調査して三軒神社建立に尽力、翌二年藩内の式内社の調査を行うも眼病を患い失明、同三年藩校の皇学科教頭となる。また『日本教育史資料』によると及淵の「公正塾」は岡山城下紺屋町に、嘉永五年(明治五年の間あり、調査した明治五年には六〇〇人の生徒がいたとある。明治十二年六月十二日死去。(『岡山市史第三巻』『岡山市史人物編』『岡山県歴史人物事典』)
- (18) 前掲注7参照。
- (19) 幕末・維新の国学者・石見津和野藩士。姓は野々口、のち大國。平田篤胤に

- 国学を、昌平塾で儒学を学び、洋学もおさめる。京都に家塾報本学舎を開き、津和野藩校養老館教授となる。維新後は神祇局諮問役・宣教師御用掛などを務めた。著書多数。明治四年(一八七二)歿、八〇歳。(『美術人名事典』思文閣出版)
- (20) 『美術人名事典』
- (21) 上田及淵。前掲注(17)で述べたように、上田は明治二年式内社の調査を行っていた。
- (22) 『岡山商売往来 吉備の魁』明治一六
- (23) 俳人。寛政八年(一七九六)一明治七年(一八七四)浅口郡長尾村で小阪甚蔵の子として生まれ、のち岡山城下瀬尾村(現清輝本町)小野田知尚の養子となる。邸外に摘青洞という草庵を営み子弟の教育の場とした。(『岡山県歴史人物事典』)
- (24) 果樹栽培草創期の指導者。一八三二一八九七。津高郡栢谷で代々名主役の家生まれる。国文や漢文に長じ、明治五年里正、八年県庁に登用される。授産掛官当時、高崎五六県令にブドウ、オリーブの栽培を勧める。明治十二一二十三年県会議員となり、国会開設請願、児島湾干拓事業などに奔走、明治二十二一二十六年栢谷村などが合併した野谷村の初代村長に就任。ブドウなどの試作、栽培を奨励する。(『岡山県歴史人物事典』)
- (25) 岡山県立図書館には「神社考証書」という和装本が所蔵されている。目録によると、この資料は、岡山藩管内式内社取調方の大森九郎太、御船島子、川崎豊後の三名が、式内・式外の十四社(児島郡二、上道郡二、邑久郡四、御野郡六社)の由緒を書上げ、明治四年(一八七二)四月に神祇官に送った書類の写しである。岡山藩では社格の決定がむずかしいので、前年神祇官の採決を依頼、未だ採決がないため、採決を促すために再度作成された。
- (26) 明治初期の考古家。一八三五一八二。京都東寺の公人、子賢の長男として生まれる。生来多彩で若くより算数家として知られたが、その本領は博物考古学にあり、社寺旧家の什宝を博覧精通し、その道で一家をなした。明治二年六月新政府の制度取調御用掛となって東上し、太政官の権少史、少史に進む。その後も博物館建設に尽力する。(『国史大辞典』吉川弘文館、一九七九一八九四)
- (27) 宝永四年二月二十二(天明二年十月十二日(一七〇七)一七八二)。備前岡山藩士。宝暦十四年(一七六四)朝鮮通信使節接待の際、部下の失態のため蟄居。以後、有職故実の研究と著述に専念。著作に「備前軍記」「湯土問答」な

ど多数。(『岡山県歴史人物事典』)

(28) 『国書総目録』、庄司喜藏『土肥修平翁伝 焼跡の釘』一九三八

(29) 『国書総目録』

(30) 前掲注(5)、①「年譜」による。

(31) 池田、肥土山、土庄、瀬崎、土庄、小海の西部六ヶ村は天保九年(一八三八)三月以降明治二年(一八六九)六月の版籍奉還まで津山藩領であった。(『香川県史 第三巻通史編』香川県、一九八九)

(32) 前掲注五①「年譜」による。

(33) 筆写注。

(34) 岡山県立記録資料館所蔵黒住家伝存資料「御領分村名石盛大庄屋名面帳 安政六年九月」から小豆島の津山藩領の六ヶ村の大庄屋がわかる。

(35) 「神山の仏やらひ」は「安々居歌集 下」(前掲注(5)①)に収録されている。神仏分離に関して激越な内容を含むが、維新时期社会の一面を理解するために引用しておく。「小豆島の中に氏神と御かまえ奉りて八幡の大神をいつき祭れる五所なんありける、いつの頃よりか御前の事ともすへて法師ともにかませたりけれハ御社こそ神々しけれ神さまも何も大かたは仏さまなりける、氏子ともへさる事ともしらて有こしを、こたひ朝廷よりの仰ことにて神社にましこりたるはとけさまのものらことく取すてさせ給ひにけり、おのれ此島にするへありて、渡りける日、北山の里なるハ八幡山に其ことありと聞てまうのほり見けるに法師らまくり手にして何くれと興めくものにかき載せ、そを白き布もて引つゝみたる、例の御幸とは事かはりてさなから極のやうにて見るもいまはし、あなかしこかゝるきたなきものともを此年月たふとき神の相殿にしも置る事かな、見るわれたにもいきとほろしく、むねふたかるをまして神の御こころにいかにつれたくおもほしけん、おしはかり奉るにもなみたさしくまれて、そゝろに身の毛もいよ立ぬ、しかはあれとけふ大君のめくみによりてかかる島わの海士すらもはしめて法師ともかをこつりに、あさむかえつる夢さめてまことの神の御稜威をもあふかんことのうれしく「すめら神のいふきならすはしみつきしほとけのけかれ吹はらはめや」「年を経しけかれ払ひて八幡山あなすかしくし松の朝風」「すなはなる民あさむきし仏らのつみはけふこそあらはれにけれ」「神風に神やはられてほとけらのかへるうしろの見るかけもなし」「くまなし、雲は晴たり神山のさやけき月をあふけもなし」なほかにかくにおもひつつくるふし、さはなれとさのみほとてやみぬ、こは明治二年二月六日の事になん」

(36) 香川県小豆島土庄町肥土山の人。文政三〜明治三十二年四月十八日、(一八

二〇〜一八九九)彦左衛門・喜太郎ともいった。古字を修め、平田鉄胤に学ぶ。明治五年(一八七二)池田亀山神社祠官、のち権少教正となる。同二十七年、土庄八幡神社社司などを歴任。和歌を能くし、古調を尊んだ。地域の振興にも尽力。(梶原竹軒『増補改訂讃岐人名辞書』高松製版印刷所、一九三六)

(37) 太田秋満の長男。弘化二〜明治二年二月(一八四五〜一八六九)倉敷県の役人となり、土岐一郎と改めた。神戸において外国人の振舞に憤慨した岡山の瀧善三郎の目前割腹事件に際し、大いに激情し、感にたえず憂国の批判を行った。その夜津山藩士と会談し、藩政に触れ親藩の津山藩を時節柄批判、津山藩士に和田岬で殺される。和田岬の人々が永福寺に墓碑を立てた。瀧善三郎と並べてあったが、戦災後、碑を舞子墓園へ移転した。(『土庄町誌』土庄町誌編集委員会、一九七二)

(38) 太田秋満の次男。嘉永元〜明治四十四年十一月二十一日(一八四八〜一九一一)岡山の真殿家(岡山城下西大寺町葉商、久見屋)の養子となり、大坂で遊学ののち、帰郷して難波次郎三郎と名乗る。第二十二国立銀行、玉島紡績所、山陽鉄道設立に尽力。(『岡山県歴史人物事典』『吉備の魁』)

(39) 『馭戎概言』のことか。二巻四冊。本居宣長著。安永七年(一七七八)二月三十日成立。寛政八年(一七九六)刊。序は鈴木胤。古代から豊臣秀吉の朝鮮出兵までの日本外交史を叙述。尊内外卑という立場を明確にしようと主張し、書名は中国や朝鮮(戎)を日本が統御(馭)するべきだと慨嘆しながら論じるという態度で付けられている。(本居記念館解説項目索引)

(40) 本稿は平成二十六年(一九九四)度岡山県立記録資料館記録と資料のセミナー第二回講演をもとにしている。講演準備に際して多くの御指導を賜りました。御礼申し上げます。

(こんどう めぐみ 岡山県立記録資料館)